

検査Ⅰ

時間 四十五分

受検上の注意

1. 解答用紙に、受検番号・氏名を記入してください。
2. 声を出して読むはいけません。
3. 解答は、解答用紙の所定のところに記入してください。
方法を誤ると得点になりません。
4. 検査終了後、解答用紙を回収します。

〔このページに問題はありません〕

以下の資料1・資料2を読み、あとの問いに答えなさい。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

資料1

ともあれ、はじめは、力の強い者が支配権を握りました。むき出しの暴力、さもなければ*1才知に裏打ちされた暴力が支配者を決めたのです。

ご存じのとおり、このようなあり方は、社会が発展していくにつれて少しずつ変わっていききました。暴力による支配から、法（権利）による支配へ変わっていったのです。

しかし、どのようにしてでしょうか？答えは一つしか考えられません。①多くの弱い人間が結集し、一人の権力者の強大な力に対抗したに違いありません。「団結は力なり！」団結の力で暴力が打ち砕かれたのです。この団結した人間の力が法（権利）としてあらわれ、一人の人間の暴力に対抗しました。法（権利）とは、連帯した人間たちの力、共同体の権力にほかならないのです。ただし、この力が暴力であることに変わりはありません。歯向かう人間がいれば、やはり暴力に*2訴えます。暴力を使って自らの意思を押し通し、自らの目的を追求していくのです。相違点はただ一つ。一人の人間の暴力ではなく、多数の人間の暴力が*3幅を利かすだけなのです。

しかし、暴力の支配から新しい法（権利）の支配へ移るにあたっては、人間の心のほうにも新たなものが芽生えていなければなりません。条件が満たされていないければならないのです。多数の人間たちの意見の一致と協力、それが安定したもので、長く続かなければならないのです。もし多くの人間の協力がつかの間のものにすぎず、一人の権力者を追い払ったあとには、団結心が失われたとしたらどうなるでしょう。何も成し遂げたことにはなりません。他の人間たちより自分の力が優っている——そう考える新たな一人の人間が登場し、ふたたび暴力による独裁をはじめましょう。際限なくこのパワーゲームが繰り返されていくことでしょう。ですから、法や権利に支えられた共同体を持続的なものにしなければなりません。いくつもの組織を創設し、社会を*4有機的なものにする。規則を作り、反乱が起きて社会を壊さないように先手を打つ。規則、つまり法律を守らせる。法にのっとった暴力を行使できる*5機関を定める——そうしなければなりません。共通の利益に支えられたこのような共同体を作ろう。多くの人がそう思うときには、人々のあいだに感情の結びつきが生まれていなければなりません。団結心です。この感情があるからこそ、共同体は強固な力を持てるのです。

これで、重要なことはすでに言い尽くした感があります。個人の粗暴な暴力が克服されるには、権力が多数の人間の集団へ^{*6} 移譲される必要がありますし、この人間集団をひとつにつなぎとめるのは、メンバーのあいだに生まれる感情の絆、^{きずな} 一体感なのです。（中略）

さて、社会が同じ強さの人間ばかりから成り立っているなら、問題はさして難しくありません。安全な共同生活を営めるようにするために、個々の人間の自由——自分の持てる力を他人への暴力として用いることができる自由——をどの程度まで制限すべきなのか。社会がそのことを掟（法律）として定めてしまえば、それで問題は解決します。

けれども、個人と社会の掟のあいだにこのようなバランスの取れた状態が実現するなど、理論の中の話にすぎません。現実の社会には、そもそもはじめから、バラバラな力を持った人間たちが住んでいます。男もいれば、女もいます。大人もいれば、子どももいます。戦争や征服が起きれば、勝者と敗者に分かれ、勝者と敗者は主人と奴隷という関係に変わっていきます。

こうなると、社会の法（権利）とは、現実の不平等な力関係を映し出すものになっていきます。法律は支配者たちによって作り出され、支配者に都合のよいものになっていくのです。支配されている人間たちの権利など、あまり^{*7} 考慮されないのです。

すると社会のなかには、法を揺るがす（と同時に法を発展させていく）二つの要素があることになります。一つは、支配者層のメンバーたちの動き。なおも残された制限を突き破り、「法による支配」から「暴力による支配」へ歴史を押し戻そうとします。もう一つは、^{*8} 抑圧された人間たちが絶えず繰り広げていく運動。自分たちの力を増大させ、それを法律のなかに反映させようとしています。支配者たちと異なり、「不平等な法」を「万人に平等な法」に変革しようとするのです。

この第二の方向が強くあらわれるのは、社会のなかの力関係が変化していくようなとき、例えば、歴史の変革期です。このようなケースでは、法はしだいに新たな力関係に^{*9} 即したものになっていきます。しかし多くの場合、力関係の新たな動向を支配者たちは十分に汲み取ろうとしません。そのため、ともすれば反乱や内戦が起き、「法による支配」が一時的に消え去って、暴力がすべてを決する状態に逆戻りしてしまいます。とはいえ、最後には新たな法秩序が生み出されます。

（中略）

このように、「法によって支配される」社会が一度できあがっても、^{*10} 利害の対立が起きれば、暴力が問題を解決するようになってしまふのです。これは避け

がたいことです。しかし皆、同じ土地の上で共同生活を営んでいる以上、いつまでもむき出しの暴力の対立を放っておくこともできません。そのため、社会生活が成り立っているところでは、すみやかに問題を收拾しようとする傾向が強くなります。平和的な解決が実現する可能性が高くなるのです。

(『ひととはなぜ戦争をするのか』アインシュタイン／フロイトによる)

- 【注】
- 1 才知 — 頭のはたらきがするどいこと。
 - 2 訴え(る) — 強力な手段を用いる。
 - 3 幅を利かす — 権力などをつかう。
 - 4 有機的 — 全体がまとまっている様子。
 - 5 機関 — 目的を達成させるための組織。
 - 6 移譲 — 権利などを他に渡すこと。
 - 7 考慮 — 多くの要素を入れてよく考えること。
 - 8 抑圧 — むりやりおさえつけること。
 - 9 即した(即する) — ぴったりと合う。
 - 10 利害 — 得することと損すること。

資料2

ここで、エジプトが二〇一一年二月に「革命」を経験してから、クーデタにいたるまでの二年半に何が起きたか、振り返っておきます。二〇一一年二月、三〇年にもわたる長期支配を続けてきたムバーラク政権が倒れたあと、エジプト国軍が^{*1}暫定政権を担うことになりました。そのもとで、国民議会選挙、大統領選挙が実施され、自由公正党という^{*2}ムスリム^{*3}同胞の政党が議会で過半数を取り、大統領にはその党首のムハンマド・ムルシーが選ばれました(中略)。

ところが、新政権ができて経済や社会は一向によくなりません。イスラーム主義を掲げる^{かか}ムスリム同胞団に対して、思想的に反発する人々や、大統領が権力を独占していくことへの不満の声も募っていきました。そんななかで、ムルシー政権が成立して一年というときに、反ムルシー派の人々が、大統領辞任を求める大規模なデモを組織しました。二〇一三年六月三〇日のことです。二〇一一年の革命でムバーラク大統領を追い落とすときよりも、もっと多くの民衆が、二年半前と同じタハリール広場に結集しました。

デモだけではありません。反ムルシー派の人々は、署名も集めました。ムルシーに辞任を求める署名は、二二〇〇万も集まったと言われますが、これはエジ

プトの全人口の四分の一以上にも上ります。署名を集めた人たちは、「もし、新政権が民主的制度をきちんと整備して、大統領*4 罷免のための国民投票などの手続きを決めていけば、十分合法的に大統領を解任できるほどの数の署名だ」、と主張しました。

路上抗議行動の規模と署名の数を頼みに、反ムルスィー派がデモを続けるなかで、現地時間の七月一日、軍が事態の收拾に乗り出しました。ムルスィー政権は四八時間以内に民衆の声に応える必要がある、と通告したのです。そして約束通り四八時間後の七月三日、軍はムルスィー政権の*5 終焉を宣言しました。ムルスィーは*6 拘束され、その支持者たちは容赦なく軍に*7 鎮圧されました。

七月三日から八月末までの間に、軍とムルスィー支持者の間で繰り返し衝突が発生し、八〇〇人を超える死者が出ましたが、そのほとんどがムルスィー派の人々でした。ムルスィーの出身母体であるムスリム同胞団の指導者、ムハンマド・バディーウなど主要な活動家は軒並み逮捕され、同胞団やムルスィーを支持するメディアや政治、社会組織は、つぎつぎに閉鎖されました。

ムルスィーを引きずりおろした軍は、暫定政権を*8 擁立します。大統領から*9 閣僚まで、欧米式の教育を受けたエジプト*10 随一の文民エリートをずらりと並べた政権でした。しかし、その権力の中心はどこにあるのかといえば、軍に他なりません。ムルスィー政権に終焉を告げた国軍司令官のスィーサー將軍は、暫定政府の副首相であり国防大臣を兼任しました。

(中略) エジプトで政権*11 転覆が実現できたのは、民衆の力も強かったけれど、実際には、軍が政権に完全に抱き込まれていなかったこと、軍が大統領を見限ったことが大きな原因なのです。もちろん、民主化を求めてデモに参加した人たちが多かったことも、重要な事実なのですが。

さらに複雑なことは、ムルスィー政権に反発して街頭に繰り出した何百万の民衆が、軍のクーデタを支持していることです。軍によるクーデタといえば、市民が反対するもの、民主主義とは対極にあるもの、というイメージがありますよね?ところが、軍のクーデタに対して、一般市民ばかりか、多くの知識人が賛成したのです。なぜでしょう?

エジプトの知識人たちが、民主主義制度のもとで選挙の持つ重要性がわかっていなかったわけでは、ありません。長く欧米社会に慣れている彼らには、議会制民主主義とはどういうものか、また*12 選挙で選ばれた議員が民意を代表するという間接民主主義が、近代史のなかで確立されてきた制度としていかに重要であるか、

わからないはずはないのです。

欧米のメデアは、二〇一三年七月にエジプトで起きたクーデタを、「民主主義に反する行為だ」、という論調で一斉に報じました。しかしそれに対して、エジプトの知識人たちは^{*12}流暢な英語で、「これはクーデタではない、民意を反映した革命だ」と主張して、軍政権を^{*13}擁護したのです。

軍に依存してまで、民主的手続きに逆行してまで、なぜエジプトの知識人たちは、ムルスィー政権を倒しなかったのでしょうか？ムルスィー政権は、イスラーム主義を掲げるイスラーム政党を^{*14}地盤として成立しました。

(『中東から世界が見えるーイラク戦争から「アラブの春」へ』酒井啓子による)

【注】

- 1 暫定 | 正式なものの決定までの間、仮のものとして決められたもの。
- 2 ムスリム | イスラム教を信じる人。
- 3 同胞 | 仲間。つながりのある人。
- 4 罷免 | やめさせること。
- 5 終焉 | 終わる直前。
- 6 拘束 | つかまえること。
- 7 鎮圧 | 力でおさえつけること。
- 8 擁立 | 地位につかせること。
- 9 閣僚 | 大臣。
- 10 随一 | 多くの中の一。
- 11 転覆 | 政府などが反対するグループにたおされること。
- 12 流暢 | すらすらと話す様子。
- 13 擁護 | 守ること。
- 14 地盤 | 活動するための基本となる場所。

〔問題1〕

①多くの弱い人間が結集し、一人の権力者の強大な力に対抗したに違いありませんとありますが、このような行動は資料2のどのような行動にあたりますか。「弱い人間」、「権力者」がそれぞれ誰にあたるかを明確にした上で、三十五字以上四十五字以内で具体的に述べなさい。

〔問題2〕

②選挙で選ばれた議員が民意を代表するという間接民主主義とありますが、共同体において法(権利)はなぜ必要なのでしょうか。理由を資料1から探し、解答らんに合うように、五十字以上六十字以内で述べなさい。

〔問題3〕

あなたが考えるリーダーシップとはどのようなものですか。あなたの考えについて五百字以上六百字以内で答えなさい。
ただし次の〔条件〕と、「きまり」にしたがうこと。

〔条件〕

1. 第一段落では、資料1と資料2、それぞれの内容にふれて、筆者の考えをまとめること。
2. 第二段落では、あなたが考えるリーダーシップとは何かを書きなさい。
3. 第三段落では、中学校生活のどのような場面で活かすか、具体的に書きなさい。

〔きまり〕

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。
- 読点(、)や句点(。)や括弧(「」)もそれぞれ字数に数えます。ただし、や。や「が、行の先頭に來るときには、前の行の最後の字と同じますめに書きます(ますめの下の書いてもかまいません)。
- 句点(。)と括弧(「」)が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合(。)(「)で、一字と数えます。
- 段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。
- 最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。

〔 以下余白 〕

